

モルック

— 「保健体育」（体づくり運動）の実践報告 —

関西医科大学総合医療センター分教室

1 はじめに

関西医科大学総合医療センター分教室に在籍する生徒は、病気療養のため入院生活を送っており、身体への負荷がかかり過ぎない授業展開が求められる。本実践で取り上げた「モルック」は、投擲動作という比較的低負荷な運動でありながら、高度な戦略性や得点計算などの数学的要素を含んでおり、身体的制約の有無に関わらず全ての生徒が主体的に参加できる特性を持つ。本校では、生徒が自身の体調を管理しながら、対話を通して作戦を立て、互いのプレーを認め合う姿をめざした。

2 生徒について

関西医科大学総合医療センター分教室で学習する生徒の運動経験は極めて多様であり、競技経験が豊富な生徒がいる一方で、不登校等の経験から他者と身体を動かすことに不安を感じている生徒も少なくない。周囲との技能差を過度に意識し、消極的になりやすい実態を踏まえ、「心理的な安全性の確保」と個々の状況に応じた段階的な課題設定を重要な課題とした。技能の優劣のみに価値を置くのではなく、多様な背景を持つ他者を認め合い、サポートし合いながら目標を達成する経験を積ませることを主眼に置いた。

3 教材について

本単元では、モルックを通して「力を調整して投げること」「先の状況を想像し、戦略を考えること」「自らの体調と向き合い、安全に参加すること」をねらいとした。

- ・ 教具の工夫：病院内の限られたスペースを考慮し、かつ繊細な力加減やコントロール方法を考えさせるため、投擲物をカラー玉からウレタン棒に変更した。
- ・ ルールの独自アレンジ：競技の難易度を上げ、戦略の必要性を実感させるため、以下のルールを追加した。
 - ① 2回連続の投球ミスは0点とする。
 - ② 投球回数は10回。
 - ③ 3投目以降、スキットルを1本だけ倒した場合、その1本は回収する。
 - ④ 35点到達時に、回収されたスキットルを元の位置に戻す権利を与える。これにより、自分の点数だけでなく、相手の状況やスキットルの配置を把握し、「自ら選択し判断する活動」を促すよう設計した。

4 実践

授業では、身体的負荷を考慮し、起立することに負担がかかる生徒は座位のまま挨拶や投球、ふり返りを行えるよう配慮した。展開場面では電子黒板を活用して視覚的にルールを提示し、特にウレタン棒への変更に伴うフォームやリリースポイントの変化を意識するよう言葉がけを行った。また、教員もゲームに加わることで少人数の生徒が安心して活動できる環境を整えた。

I 実践報告

授業の流れ

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等
5分 導入	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 ・本時の流れ ・記録係、投球順番決め (人数が少ないため、教員も入る) 	<ul style="list-style-type: none"> ・起立することに負担がかかる生徒は座位のまま行う。姿勢を正して挨拶を行う。 ・本時の活動内容とゲームのルールを説明し理解を促す。
35分 展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム開始 ・本時のルール（電子黒板に表示する） <ol style="list-style-type: none"> ①50点先取（もしくは50点に近い人が勝ち） ②得点の数え方 1本倒す＝ボトルに書かれた点数 複数本倒す＝倒れた本数が得点 ③下投げ ④2回投球ミスは0点 ⑤投球回数は10回 ⑥3投目から1本だけスキットルを倒すと、そのスキットルは回収される ⑦35点に到達した時に、回収されたスキットルを戻すことができる (戻す場所はスタート時と同じ位置) ・結果発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板に表示しているルールに注目し、アレンジしている箇所④⑤⑥⑦の確認をして理解を促す。 ・カラー玉からウレタン棒に変更しているため、フォームやリリースポイントの変化を意識するよう言葉がけを行う。 ・着席し、ホワイトボードに注目して行う。
5分 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・感想やふりかえり ・挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員椅子に座った状態で行う。各チームにインタビュー形式で感想や良かった点、難しかった点を聞く。 ・起立することに負担がかかる生徒は座位のまま行う。

5 本時の振り返り

- ・思考、判断（先の状況を考えた柔軟な対応）
独自ルールにより、対戦相手の投球内容を予想し、変化する状況に応じて自分の投球内容を柔軟に考える姿が見られた。
- ・主体的な対話
生徒から「この状況ではどれを狙うべきか」という問いかけが生まれ、それに対して他の生徒が意見を出し合うなど、互いの考えを共有し、最適な選択肢を自ら導き出す場面が見られた。
- ・学びに向かう力（相互受容）
勝ち負け以上にゲームの奥深さを体感し、対話を通して作戦を立て、互いのプレーを認め合う姿が見られたことは、心理的安全性の確保という観点からも大きな成果である。

I 実践報告

った。

6 まとめ

本実践を通じて、病状や身体機能に応じて体勢を自由に調整できるモルックが、病気療養中の生徒にとって極めて有効な教材であることが再確認された。生徒が運動の楽しさを感じ、生涯にわたってスポーツに親しむ基盤を形成する一助となった。